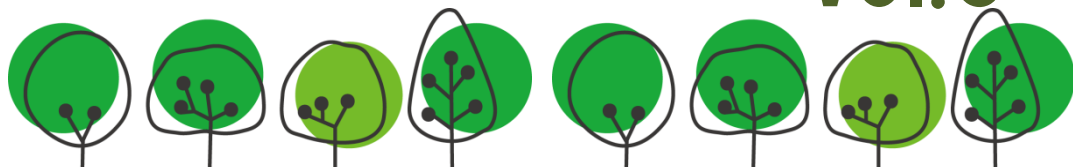




木地師のふるさと

vol.5



R1. 11 発行

「木地師文化フォーラム」を開催しました

7月15日に木地師やまの子の家で「木地師文化フォーラム」を開催しました。

北は福島県から南は大分県まで、今年も全国から木地師にゆかりのある方々や関心をお持ちの方約180名にご参加いただきました。



当日プログラム

- ◎市長挨拶 小椋正清（東近江市長）
- ①林業遺産認定証伝達式
- ②活動事例紹介
 - 「木地師のふるさと アーカイブプロジェクト」
 - 須藤護さん（龍谷大学名誉教授）
 - 高田清さん（アーカイブプロジェクトボランティア）
- ③パネルディスカッション
 - 「木地業を地域づくりに活かす試み」
 - 産業としての新しい価値と発信-
 - コーディネーター：櫻井龍彦さん（名古屋大学名誉教授）
 - パネリスト：矢羽田匡裕さん（ウッドアート楽代表/木地師）
 - 酒井義夫さん（ろくろ舎主宰/木地師）
 - 山下亨さん（岡山市美作市特定政策担当）

①林業遺産認定証伝達式

5月28日に一般社団法人日本森林学会（会長：黒田慶子）から林業遺産として認定された「木地師文化発祥の地 東近江市小椋谷」について、所在地の方々に認定証が伝達されました。

滋賀県内では初の林業遺産の認定であり、林業に関する場所やモノだけでなく、文化として認定されたのは全国で木地師文化が初めてとなります。

推薦者の山下直子さん（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所主任研究員）にお越しいただき、推薦に当たっての思いをお話いただきました。今回の認定を機に、貴重な地域資源にさらに磨きをかけていただくとともに、後世への伝承をお願いしたいとの言葉もいただきました。



②活動事例紹介「木地師のふるさと アーカイブプロジェクト」

昨年度から東近江市で取り組んでいる「木地師のふるさとアーカイブプロジェクト」について御指導いただいている龍谷大学名誉教授須藤護さんとボランティアの高田清さんから活動紹介をしていただきました。

このプロジェクトの1つ目の目的は、東近江市が所有している資料や製品を正確に記録し、まとめたものを全国に発信し、木地師の皆さん、木の文化に興味のある方々とコミュニケーションをとることです。

2つ目の目的は、市民を中心に、県内、国内、世界の方々に、木の文化に直接触れてもらうことです。優れた文化には地域を活気づける力があります。このプロジェクトを通して、地域の方々が住み続けていくことに自信を持ち、地域を豊かにしていくことにつながると考えています。（須藤 護）

昨年8月に市がボランティア募集を行い、10月から本格的に始動しました。

目的は、市が所有する資料や製品を分類・整理すること、製品や資料に触れながら学ぶことです。

資料や製品を、1つ1つ手にとり、サイズ計測、イラスト・図面の作成、写真撮影を手分けして行い、台帳にまとめています。能登川博物館の台帳によると、858点登録されていますが、製品の最小単位にすると1,289点になります。

また、調査を進めていく中で、興味深いものが毎回出てきます。それについて、ボランティア同士で話をしたり、次の活動日に須藤先生から資料などをいただき、解説を聞いたりしながら、学んでいます。加工途中の椀やそれを挽くための台が出てきた時には、どのように椀を挽くのかを学びました。大きな鋸が出てきた時には、どのように木を切り出していたのか、貴重な映像で学びました。

そして、本日展示している「こけし」については、全国に11系統あり、それぞれに特徴があることを学びました。市が所有するものの中にも「こけし」が220点あり、全ての系統を見ていただくことができるということもあり、展示することにしました。

膨大な点数があるので、スピードアップしていきたいのですが、正確な計測・作図と両立しながら進めていく必要もあります。興味をお持ちの方はぜひ御参加ください。

（高田 清）



ボランティアスタッフによるこけしの企画展示

③パネルディスカッション～行政からの目線～

「岡山県美作市での取組」岡山県美作市政策担当 山下亨さん

美作市は岡山県と鳥取県の境に位置しており、江戸時代から、美作市の木地山集落から右手峠を越え、因幡・新田・白坪の間屋に卸し、賀露港から北前船で全国に木地物や漆器を売っていくという流れがあったようです。現在、木地山部落には3名の木地師がおり、椀や盆のほか、コーヒーカップやワイングラス等の新しい商品も製作しています。また、木地師の道具や古文書等を展示した「木地師の館」や木地師のお墓等があり、木地師の歴史を伝えています。

美作・右手木地山の木地業は地域産業にはほど遠いのが現状です。しかし、頑張っている木地師を応援することが行政としての役割だろうということで、東近江市からも刺激を受け、取り組んでいます。展示販売やろくろ体験ができる「木地師まつり」の開催や大都市で開かれるイベントへの参加のほか、漆師とのコラボ支援等ができることから始め、徐々に大きくしていきたいと考えています。



木地山集落の人々

③パネルディスカッション～現役木地師からの目線～

「木地仕事の可能性と価値の再定義」ウッドアート楽代表/木地師 矢羽田匡裕さん

脱サラをして、大分県日田市で20年ほど前から木地師をしています。地元で就職し、青年団活動等に参加していたことで地元が目が向くようになっていた頃、JA 大山の「梅の木工房」という梅の古木を利用して新たな産業や製品を作るという事業に飛び込んだのがきっかけでした。話題性もあり、多くのメディアにも取り上げてもらいましたが、儲からないというのが現実でした。3年後に独立開業し、素材を梅の木にこだわらず、自社製品だけでなく、受注製品も作るようになり、儲かるとまではいきませんが仕事が安定してきました。また、個性的な商品を作ることによって、問い合わせが増え、定番のお椀等も評価され、売れるようになり、自分自身の価値を見直すこともできました。そして、モノに価値があれば売れることが実感できました。

「梅の木工房」事業で指導してくださった師匠の時松辰夫先生の言葉ですが、「技術の価値を経済の価値にする」ということ、独りよがりなものづくりでは産業として育たないという教を胸にこれからも地域雇用にも役立つように努力していきたいと考えています。



ヒット商品「きのいい鏡餅」

「木地師であるという姿勢」ろくろ舎主宰/木地師 酒井義夫さん

独立して5年、越前漆器の産地・福井県鯖江市河和田地区でショップを併設した工房を構えています。最初は本当に仕事がなく、まずは自社製品を合同展示会に出していくことから始めました。最初に出展した「TIMBER POT (ティンバーポット)」というスギの間伐材の鉢植えカバーが展示会で賞をもらい、海外にも出展させてもらったことをきっかけに少しずつ仕事が入り始めました。その後、ウレタン塗装の塊から作るアクセサリー等を製作し、昨年ようやく自社でお椀を作りました。最近、一番の軸としている商品としては、形が5種類、塗りも5種類から選べるセミオーダーの「オンリー椀」です。工房を身近に感じてもらうために、写真や道具を見せて説明をし、理解してもらった上で、オーダーしてもらうという形にしています。意外にも反響があり、お椀を求める人が多いことを実感しました。

また、アパレル店や雑貨店、ギャラリー等のおしゃれなお店で受注会を行うなど、見せ方についても気を使っています。

地域に自分よりも年下の職人がいないということは生計が立てられないからであり、その状況を打破するためにも生業にしていける値段で仕事を取ってくることも心掛けています。

また、自分がつくることを大事にするだけでなく、お客さんが幸せなのかということも最終的な目的として大事にしています。



「オンリー椀」広報ポスター

「パネルディスカッションのまとめ」名古屋大学名誉教授 櫻井龍彦さん

- ①木という素材を大切に使い、こうという心が木地師の心としてあることがうかがえた
- ②様々なチャレンジ・創意工夫の精神を持っておられる
- ③ブランド力を磨いていくために、自分自身も高めていきたいという向上心を持っておられる
- ④地域社会との連携を持ち、地域の人々と関わりながら、仕事をしている

今回のフォーラムが皆様の身近な問題を解決するためのヒントになればと願っております。



③パネルディスカッション～木地師への会場からの質疑～

Q：売れる商品はどのように予想するのか。

(矢羽田)自分のつくる商品が誰に売れているのかと考えると、30～60歳代の女性なので、女性従業員の意見を聞きます。見本を作って、手に取ってもらいながら、従業員にプレゼンします。仕事には全然関係ないと思われる会合等でも常にアンテナを張って、自分の仕事に置き換えて考えるようにしています。

(酒井)売れる売れないは考えないようにしています。売れる売れないを考えてものづくりをすると自分の製作意欲も下がるので、自分がよいものを作って、ちゃんと伝える努力をしています。

Q：職人が交流する場や作品を発表する機会を作ることが必要ではないか。

(矢羽田)基本的には自分自身の商売なので、普段から自分で動いて頑張ることだと思っています。しかし、もし手を差し伸べてくれるのであれば、もう少し現場を見たり、職人の話を聞いたりしてから、やってもらいたいと思います。行政の支援が逆に足かせにあることもあります。今は自ら動いて、自然発生的にできた場が自分にとってはよい場になっています。

(酒井)交流会にもよく参加しましたが、何か生まれたという経験はあまりありません。体験型イベントの開催を続けていく中で、参加した学生が地域に残り、地域の企業に勤めたり、移住したり、という動きが見られました。無理矢理マッチングするのではなく、続けていく中で、自然に起こっていくように感じています。

Q：木地師の心とは何か。

(矢羽田)簡単に木地師を名乗ることができないと思っていますし、普段は木工屋と名乗っています。ものづくりとして普段から、先輩方や様々な技術も持たれている方全てに敬意を払った上で、作り手として負けたくないと思っています。自分が作るものには責任とプライドを持って、送り出しています。真摯にものづくりに取り組み、買った人が誇りにできるような作り手になることで、経済的価値が生まれると思っています。

(酒井)成果にこだわらない活動としていますが、伝統的な漆器を作っている職人さんをすごく尊敬しています。当たり前に使っているものが一番よいと思っているので、形も塗りもシンプルなものを作成しています。木地師を職業とは捉えず、木地師として正しい姿勢で取り組めていたら、木地師を名乗ってよいと思っています。

「木の総合文化・ウッドレガシー」が開催されます！

東京五輪・パラリンピックが開催される2020年の国際森林デーに合わせて、日本の木の文化を世界発信するため、「木の総合文化・ウッドレガシー」が2020年3月に東京で開催されます。

東近江市ではこのイベントへの参加に向けて調整を進めています。

詳細が決定し次第、お知らせします。

木地師のふるさと 東近江市

発行：東近江市企画部企画課

〒527-8527 滋賀県東近江市八日市緑町10番5号

TEL(代表) 0748-24-1234 (直通) 0748-24-5610

FAX 0748-24-1457

Email kikaku@city.higashiomi.lg.jp

Facebook <https://www.facebook.com/higashioumi.kijishi>

(Facebookでは随時、お知らせ等を行っています!!)

